

## JICA 教師海外研修 学習指導案・授業実践報告書

### 【実践者】

氏名	玉腰朱里	学校名	東京都立大泉高等学校附属中学校
担当教科等	国語科	対象学年（人数）	中学3学年（116名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2019年10月～11月（6時間）		


### 【実践概要】

1. 実践する教科・領域：国語科		
2. 単元(活動)名：君待つと——万葉・古今・新古今		
3. 授業テーマ：「時空を超えて、人が繋がるために」		
<p>単元目標：和歌に現れる心情を読み取り、時空を超えた文化や価値観の変遷と普遍を考える。</p> <p>関連する学習指導要領上の目標：第三学年目標（1）社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。</p>		
4. 単元の評価 規準	①知識及び技能	(1) 社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。
	②思考力、判断力、表現力等	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
	③学びに向かう力、人間性等	(3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。
5. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	<p><b>【単元設定の理由】</b> 二学期は「翻訳」をテーマに単元を設定している。人が言葉を通して自分の思いを表現し、互いの考えを理解することはできるのかを議論しながら、『論語』や魯迅『故郷』という中国の文章を中心に六つの教材を扱ってきた。今回は、同じ土地に暮らした過去の人々の感情を和歌から「翻訳」するために単元を設定した。</p> <p><b>【単元の意義】</b> 本単元「君待つと——万葉・古今・新古今」は、表題の三大歌集から取られた十五歌を併せ読む単元である。「古今和歌集 仮名序」にあるように、古くから「生きとし生ける」全てのものが詠んできた歌というものには、「天地」や「鬼神」の心をも動かす力があると考えられてきた。生徒の心を動かし、時空を超えて変遷してきた文化や価値観の歴史や、それでもなお変わらない人間の普遍性に思いを馳せる単元としたい。</p> <p><b>【児童/生徒観】</b> 本校は東京都立の中高一貫校である。対象生徒は学習に積極的に取り組んでおり、古典学習への意欲は高い。一方で、中学校三年間で培われた内進生としてのアイデンティティは非常に強く、内向的な雰囲気も感じられる。来年度には高校受験を経て入学する高入生を新たに迎え、共に学ぶ仲間として集団を編み直すことになるにあたり、自分とは文化や価値観が違う人と心を繋げ、文化を融合することについて深く考えさせたい。</p> <p><b>【指導観】</b> 為政者から庶民までが平明な言葉で自らの感動を詠んだ日本最古の歌集「万葉集」、日本最古の勅撰和歌集として日本文化全体に影響を与えた「古今和歌集」、貴族支配が終わりつつあった鎌倉期にその華麗な文化を凝縮した「新古今和歌集」の三大歌集の特徴を生徒に捉えさせるとともに、歌に描かれる人間の普遍的感情を自分事に翻訳できるか考えることを主眼として指導したい。</p>	

6. 単元計画 (全6時間)				
時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	文学史	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本では古くから歌が愛され続けてきたことを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書「万葉古今新古今」を黙読し、初読の感想を書く。</li> <li>「古今和歌集」仮名序の「生きとし生けるものいずれか歌を詠まざりける」を復習し、現代短歌や「おくのほそ道」の俳句の既習事項を思い出す。</li> <li>歴史的仮名遣いを確認し、音読して味わう。</li> <li>「万葉集」の二首の感動の中心を学び、句切れ・係り結び・修辞技法などの文法事項や詠み手の情報を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国語教科書</li> <li>国語便覧</li> </ul>
2	普遍と変遷	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間を越えた普遍と変遷について整理する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「新古今和歌集」三首の歌意の確認。</li> <li>和歌に描かれる普遍的な感動の中心を読み取るためには、科学技術や価値観や寿命などの当時と今との変遷を理解することが必要だと気付く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国語教科書</li> <li>国語便覧</li> </ul>
3	和歌の感動を翻訳する	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間を越えた普遍と変遷について考えを深める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「古今和歌集」と「万葉集」の八首を一人二首ずつ分担し、次時に行う発表の準備をする。</li> <li>発表の際には、当時と今との変遷を踏まえて普遍的な感動の中心を翻訳することに注意する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国語教科書</li> <li>国語便覧</li> </ul>
4		<ul style="list-style-type: none"> <li>感動の中心を自分事として物語る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>四人グループを作り、グループ内で発表する。</li> <li>質問をしあって和歌を理解し、各自の和歌の感想を共有しながら読解を深める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国語教科書</li> <li>国語便覧</li> </ul>
5 本時	時空を超えて人が繋がるために	<ul style="list-style-type: none"> <li>文化や境遇に差異があっても、時空を超えて連帯することは可能だと気付く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>防人歌の歌意の確認。</li> <li>「万葉集」には文字が書けない地方の庶民の歌も多く残っている理由を考え、同時代の文字を書ける役人や後世の人々が歌の詠み手に心を寄せたことに気付く。</li> <li>パラグアイの児童が日本の東日本大震災に心を寄せて詠んだ俳句や、大友家持「防人の情と為りて思を陳ぶる歌」を知り、人間の普遍性があるからこそ心を繋げることができるし、自分に何かできないか考えることができると気付く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国語教科書</li> <li>国語便覧</li> <li>現地撮影写真</li> <li>ラ・パス日本語学校生徒作品</li> </ul>
6	和歌の変遷から見る文化の融合	<ul style="list-style-type: none"> <li>古典文学にある変遷を踏まえ、多様な背景を持つ人々やその文化を現代でどう融合すべきか考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大友家持「春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ」の歌意の確認。紅白の桃李になぞらえた晴れやかな心情を読み取る。</li> <li>奈良中期に最も詠まれる花は梅、平安以降は桜だが、「万葉集」では萩だったという価値観の変遷を知る。また、「古今和歌集 仮名序」や令和の出典である「万葉集 梅花の宴」にも海外の文化の影響があることを知る。</li> <li>伝統的で不変のものだというイメージがある古典にすら変遷があり、多様な背景を持つ人々やその文化を排除しないだけでなく、文化を融合させて伝統を作ってきた。だからこそ和歌集の普遍性は古典として生き残ったのだと気付く。</li> <li>給食のメニューや若者文化など現代でも多様な文化の融合が起こり、それが新たな伝統となっていく実例を挙げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国語教科書</li> <li>国語便覧</li> <li>現地撮影写真</li> </ul>

7. 本時の展開（5時間目）

本時のねらい：文化や境遇に差異があっても時空を超えて連帯することは可能だと気付く。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動 ・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料(教材)
<b>導入</b> (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語彙テストの実施。相互採点と回収。瞑想。</li> <li>・生徒による読書紹介。</li> </ul>		
<b>展開1</b> (20分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書の和歌を音読する。前時の復習。</li> <li>・防人歌「父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる」の歌意の確認。</li> <li>・係助詞によって父母の言葉を今でも忘れかねているという心情が強調されていることや、万葉仮名によって方言までもがそのまま書き残されていることを読み取る。</li> <li>・防人制度に触れ、その道のりの過酷さや福祉等の状況が未整備なことにより、家族との別れの辛さが一層増していることを確認する。</li> <li>・この歌には「右の一首、丈部稲麻呂」と詠み手の名前まで残されているように、「万葉集」には東歌や防人歌など地方の庶民の歌が多く残っているのはなぜか考える。</li> </ul> <p>→文字を書ける役人が貴重な木簡を使って記録し、後世の人々が時空を超えてその心を繋げて書き写し続けたから。立場・居住空間・時空を超えて、人々の心が繋がっていた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机をコの字型にする。</li> <li>・教科書の脚注を参考に、気付いた点を隣の席の生徒同士でバズセッションさせる。その様子を観察して何名かを指名し、クラスに意見を発表させる。以下同様に、各発問はバズセッションを中心に展開する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国語教科書</li> <li>・国語便覧</li> <li>・現地撮影写真</li> <li>・ラ・パス日本語学校生徒作品</li> </ul>
<b>展開2</b> (15分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東日本大震災の直後に宮城県女川町立女川中学校の生徒が詠んだ俳句に、世界中の人々が下の句を付け足した実話（中学校一年生の国語の授業で既習）を思い出す。</li> <li>・教師海外研修中に、ラ・パス日本語学校の小学六年生を対象に俳句の授業を実践したことを紹介する。内陸国で地震がないパラグアイの児童に東日本大震災の俳句の話を紹介すると、「父親がいなくなってもそばにいる」という俳句を詠んでくれた。その児童は時空を超えて女川の中学生に心を寄せていたことに気付かせる。</li> <li>・大伴家持が詠んだ「(防人の情と為りて思を陳ぶる歌) 今替る新防人が船出する海原の上に波な咲きそね」を知り、時空を超えて人は感情を翻訳し、自分事にすることができるのではないかと考える。</li> </ul>		

<b>まとめ</b> (5分)	・防人歌を中心とした本時の学習内容を踏まえ、人の感情の普遍性とそれを自分事にするについて、自分の考えを書く。		
<b>8. 評価規準に基づく本時の評価方法</b> ①知識及び技能：ワークシート、授業中の観察、定期考査 ②思考力、判断力、表現力等：ワークシート、授業中の観察 ③学びに向かう力、人間性等：授業中の観察			
<b>9. 学習方法及び外部との連携</b> ・近隣の席の生徒と自由に意見を交換するバズセッションを中心として授業を展開した。このことにより、中学生にとっては多くの予備知識が必要な和歌の読解であっても、生徒同士の意見交換やそこから生まれる疑問を取り上げて活用する授業を展開できた。 ・黒板を中心としたコの字型に生徒の机を移動させて授業を行った。このことにより、生徒は学習中のお互いの表情や反応を見ながら、対話的な雰囲気の中で授業に参加できた。 ・勤務校の卒業生であり、国際的ジャーナリストとして活躍されている池上彰氏が本単元の授業を参観してくださった。このことにより、校内での国際理解教育の実践に注目が集まり、より多くの教員と研究協議を行うことができた。			
<b>10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組</b> ・教員対象の報告会の実施。(11月職員会議) ・道徳の授業「国際理解・国際協力」単元の企画と実施。(中3全クラス、計4時間) ・池上彰氏による講演会(「池上彰の世界の見方——インド編」)(中3全クラス、全6時間)と、池上彰氏による授業参観(第六時)。 ・国語の授業における「作家の時間——社会課題を一人称で物語る」単元の実施。(全10時間) ・「作家の時間——社会課題を一人称で物語る」読書会への専門家招聘と講評。(佐藤真久先生)			

### 【自己評価】

<b>11. 苦労した点</b>	国語科にしかできない国際理解・協力教育とは何かを考え、海外研修で学んだことを古典の授業として昇華すること。
<b>12. 改善点</b>	他国の文化が日本に息づいている例を取り上げることで、国と国との文化の融合について理解を深めさせることができた一方で、その融合から生まれる個性や伝統を尊重する姿勢までは十分に考えさせることができなかった。 そのため、次単元では自己存在の同一性について論じた評論文を取り上げた。自己の人格は他者の模倣によって形作られるが、そこから生まれる個性は自分自身のものであるという複数の文章を生徒に比べ読ませ、日常生活における具体例を挙げながら自分の意見を書かせた。この活動により、「部活動では先輩の真似をして上達してきたが、先輩と全く同じフォームになることはない」、「積み木で遊んでいる時、同じパーツであっても組み合わせは無限であり、どの要素をどう組み合わせるかによって個性が出る」などと生徒は考えを深めることができた。 この単元の学習後、改めて本単元を振り返ることで、文化の融合とそこから生まれる伝統を尊重することについて改めて考えさせることができた。

13. 成果が出た点  
この単元の学習をきっかけに、国際協力やボランティアに参加したいという有志生徒10名が活動を始めた。授業者が実際に海外に足を運び、目で見て耳で聞いたことを生徒に伝えられたことで、生徒の変容があったと感じる。

14. 学びの軌跡  
(児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)  
第5時のワークシート  
・「他人事にせず、自分だったら、どうしてあげたらと考えることは、大友家持が防人目線で歌を詠んだときからずっと普遍なんだなと思った。こういう感じの取り組みは最近やろう！って呼びかけられている感じがあったからびっくり。」  
→日本で最も古い和歌集である「万葉集」でこの授業を実践できたことで、国際理解・国際協力の必要の普遍性が、生徒にも実感をもって伝わったようであった。  
・「悲しかったことやつらかった苦勞を、それを経験した人ではなく聞いた人が色々な形で伝えていくところに惹かれた。(中略) 声が大きい人が声が小さい人の声をかき消すのではなく、防人歌のように逆に代弁していく。これが当たり前になったらもっと色々な感情や見方が広がるのではないか。」  
→古典文学と国際理解を結び付けて考えている様子を見とることができた。

P136 「君待つこ」万葉・古今・新古今 ④防人歌

防人歌を中心とした本時の学習内容を踏まえ、人の感情の普遍性と、それを自分事として翻訳することについて論ぜよ。

悲しかったことやつらかった苦勞を、それを経験した人ではなく聞いた人が色々な形で伝えていくところに惹かれた。(中略) 声が大きい人が声が小さい人の声をかき消すのではなく、防人歌のように逆に代弁していく。これが当たり前になったらもっと色々な感情や見方が広がるのではないか。

P136 「君待つこ」万葉・古今・新古今 ④防人歌

防人歌を中心とした本時の学習内容を踏まえ、人の感情の普遍性と、それを自分事として翻訳することについて論ぜよ。

今まで、パラグアイの話というまじりかたは、事件とか自然災害が来たときにこんなにも他国の人が協力的だとは思ってなかった。人事にせず、自分だったらどうしてあげたら、と考えることは、大友家持が防人目線で歌を詠んだときからずっと普遍なんだなと思った。こういう感じの取り組みは最近やろう！って呼びかけられている感じがあったからびっくり。」

第6時のワークシート  
・「日本はいつから始まったのかというのもあやふやだと思っている。ひらがな、カタカナが生まれたときなのか、天皇が生まれたときか、邪馬台国ができたときなのか、考えればキリがない。常に『日本』というものは変わり続けていて、その変化している道の上にたまたま古典があって、さらにはJ p o pやアニメといった文化もあると思った。『日本』という道は終わりもなく始まりもない。人が勝手に考えた境界だ。」  
→日系社会を寛容に受容しているパラグアイの様子や、古典にも現れる文化の変遷・他国の影響を取り上げることで、国という境界や伝統文化という、一見恒久的にも思えるものの変遷について、生徒に深く考えさせることができた。

	<p>・「古典すら変遷するのは当たり前だと思った。古典っていうのは面白いと感じるから時代を超える。だけど、もし古典が「ザ・日本」ですって感じで日本観の押しつけのゴリ押しだったら、きっと独りよがりですまらない。」</p> <p>→文化の変遷・他国の影響を柔軟に受け入れることで、古典作品が時空を超える魅力を持ち、古典作品として生き残ってきたと、古典作品と多文化共生を繋げて考えさせることができた。</p>
<p>15. 授業者による自由記述</p>	<p>教師海外研修を通じて他校種・他教科・そして様々な形で国際協力に携わる方々との多くの出会いがありました。この出会いにより、国語科教員である私がどのように国際協力に貢献していけるかという大きな課題に向き合うことができました。まだまだ答えは出ませんが、国語科が言葉を扱う教科であることにヒントがあるように思います。</p> <p>言葉を通して他人の思いをわかろうとし、言葉を通して自分の思いを伝えようとする。そのような授業を通じて、時空を超えて他人の思いを自分事として理解しようとする姿勢を育み続けていきたいと思っています。</p>

参考資料：

- ・黒澤弘光・竹内薫『心にグッとくる日本の古典』NTT出版
- ・松田修『カラー版古典の花 万葉花譜 春・夏』国際情報社
- ・松田修『カラー版古典の花 万葉花譜 秋・冬』国際情報社
- ・松田修『古今・新古今集の花』国際情報社
- ・山田卓三・中嶋信太郎『万葉植物辞典 万葉植物を読む』北隆社